

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.12

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 本を探す楽しさ、読む楽しさ

大屋敷 孝雄 (薬学部教授・学生部長・医博)

⇒ 情報化社会でよりよく生きるために

轟 里香 (外国語学部助教授)

⇒ 勤勉でない方へ

矢野 寛和 (薬学研究科博士前期課程1年生)

⇒ 自分を磨く場所 -CLEVER HOUSE-

由井 久美子 (外国語学部4年生)

⇒ 大学生活と図書館

町 賢司 (法学部4年生)

⇒ 図書館唯識 -先哲との邂逅-

北村 喜義 (法学部教授・学術資料委員)

< Bulletin NO.13 >

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
2nd-Half 2001



本を探す楽しさ、読む楽しさ

大屋敷 孝 雄



21世紀はIT (Information Technology) 時代の到来と言うことで、猫も杓子も小さな電子箱に向かって1日中活字とにらめっこをしている姿が多く見られる。最近では、本もインターネットで自宅に居ながらにして購入することや、読むことができるようなシステムになってきていると聞き、パソコンを使いこなすことのできない筆者にとってはいやな時代になったものだと感じている。

私は4年間の大学時代を東京の神田で過ごしていたこともあり、昼休みや講義終了後など、別に目的の本があるわけでもないのに、よく友達と神保町の古本屋街を歩き回っていたものである。本の好きな私にとっては、この意味のない徘徊(?)が何ともいえず楽しいことであり、思いも寄らなかった本に出会う楽しみもあった。疲れれば、喫茶店に入り一休みする……いい時代だったと、つくづく思う。ちなみに、当時、筆者は五木寛之と井上靖の作品を愛読していたが、積ん読が多かった。

しかし、インターネットで本が購入できるようになるとわざわざ本屋に行き、あれやこれやと探すこともなくなり、ただ目的の本を簡単に手に入れるという無味乾燥な手段だけになり、本を探しだす楽しみはそこにはもはや感じ取れない。本を探す手間が省け、時間が有効に使えていいと思う人も多いかもしれないが、むしろ筆者などはこのような無駄と思われる時間をもつことに意味があるように思える。また、時間をかけ、苦勞して探し出した本には愛着もあり、大事に扱ったものである。

現在は文章よりも劇画の類が好まれているようである。確かに、筆者の学生時代の頃のものに比べると、技術は数段進歩しており、画は綺麗でしかも内容もリアルなものが多い。しかし、画像からはある限られたイメージしか浮かばないのに対して、文章を追うという作業からは限らないイメージが湧いてくる。その場の情景や登場人物の人間性、生き方などが想像され、読者本人もその場に居るような錯覚に陥ることすらある。面白さに釣り込まれ、ついつい時間がたつのも忘れて読み通し、気が付いたら明け方になっていたという経験を持っている方も多いのではないだろうか? 時を忘れさず楽しさが読書にはある。

また、時を経て、一度読んだ本をまた久しぶりに読み返すと以前とは全く違った解釈をすることも多く、以前に読んだ時には共感できなかった作者の考え方に共鳴することができたり、その時には気づかなかった作者の微妙な表現の意味に気がついたり、いろいろ再発見することもままたり、その解釈の変化には読者の時間的要因が大きく関わっており、読者自身の内面的、外面的変化を反映している鏡になっている。読書の楽しさはこのような自分の中での変化を知ることができるところにもあるように思われる。

(薬学部教授・学生部長・医博)



情報化社会でよりよく生きるために

轟 里 香

「周りで起きていることの意味がわかりはじめたのは、何歳ごろからですか？」このような質問を何回かしたことがある。「中学生くらいから。」という答えが多かったように思う。そうだとすれば、実際に自分で身をもって経験した時間というのは、20歳の人だとわずかに7、8年ということになる。

中には、上のような非常に乏しい直接経験だけに基づいて、社会や歴史を認識している人がいる。そういう人にとっては、自分が覚えていないころのこと（あるいは生まれる前のこと）はみな渾然一体となっているようである。第二次世界大戦も、関ヶ原の戦いも、同じように「すごい昔」というわけである。これでは明らかに時代の認識が間違っているといえるだろう。

もちろん、どんな人でも、自分の直接の経験だけに基づく知識は極めて限られたものである。これを補うことができるのは、古今東西の人々の知識の蓄積 - すなわち、本である。本を通して、私たちは時間的にも空間的にも、自分一人では決して得られない膨大な知識に触れる機会がある。そして、その場となるのが図書館である。それらを活用していれば、体験者がまだたくさん生存している戦争を「すごい昔」だと言うようなことはないだろう。

現代社会において、私たちは、本のみならずインターネットという強力な情報収集の道具を手にすることができた。それで、情報の量が不足するということはない。それどころか、情報の海を泳いでいるようなものである。手に入れたいという意欲さえあれば、いくらでも情報を手にすることができる。

このような社会において問題となるのは、周囲にある膨大な情報の中から、有用なものをいかにして取り出すかということである。本においても、インターネットでも、提供されているのは質の高い情報ばかりではない。真偽の程が疑わしい情報も氾濫しているのが実情である。確かな情報源と思われるところから出ている場合でも、人間が書いたものである以上、多かれ少なかれ、書いた人の主観に基づいている可能性が高い。これらをそのまま受け入れることは、他の人の意見を無条件で自分の意見とすることになる。あまり深く考えないで他の人の意見（特に多数派の意見）に合わせておけば楽ではあるが、みんな一緒に間違った方向に進んでしまう危険性もあることを、歴史が証明している。

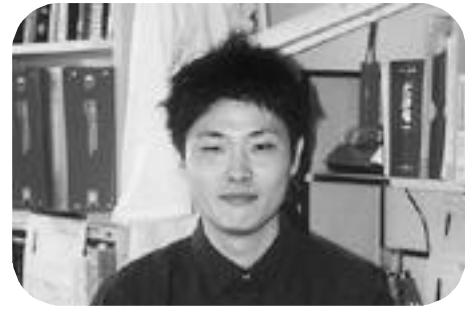
では、できるだけ客観的で公平な情報を、なるべく効率よく収集するにはどうしたらいいのだろうか。自分で手当たり次第に本を読み、試行錯誤を繰り返していく、というのも一つの方法だが、これだけだと無駄も多いし、非常に時間がかかってしまうだろう。自分で多くの本を読むことと並行して、情報のいわば「鑑定士」の意見を参考にするとよい。骨董品の鑑定士が本物と偽者をすばやく的確に見分けるように、情報の質や有用さをすばやく見分けられる人がいる。大学の教員にはこの「情報の鑑定士」がいる。その判断から学べば（つまり教員が薦める本や文献を積極的に読むようにすれば）有用な多くの情報を短時間で得ることができる。それだけでなく、どのようなものが質の高い情報といえるのか、見分ける能力を身につけていくことができる。

このように、大学においては、情報そのもののみならず、上で述べたような「情報の鑑別能力」についても学ぶことができる。そのためには、最初に述べたように、まず学ぶ意欲がなくては何も始まらない。教員の指導及び図書館を積極的に活用することにより、卒業後、情報化社会において有用な人間となることができるのである。

（外国語学部助教授）

勤勉でない方へ

矢野 寛 和



苦しい時期はいつも図書館に通っていたように思えます。再々試験の時、大学院入試の時、卒業試験の時、そして国家試験の時。必要なのはカバン二つ分。大量の過去問、数冊の青本、黒本、CDウォークマン、紺色のひざ掛け。これは結構な重量で、図書館の階段を上がる貧弱な私の両腕は筋肉痛でした。

何故そんなに足繁く図書館に通っていたのでしょうか。静かであるから？机が広いから？エアコンが効いているから？勿論それも理由の一つに含まれているのだと思われませんが、それだけではないような気がします。私は、毎日コツコツとしか勉強できません。

実際、先述したような苦しいイベントの時期以外はおそらく出向いた事は無かったと思いますし、きっと頭の片隅にも存在してはいなかったでしょう。しかし、自分が苦しくなると真っ先に転がり込むのです。都合の良い話ですが、勿論図書館は拒みはしません。障害を突破するのに足るぎりぎりの知識を修得する時間を、心地良い睡眠時間を、これだけ勉強したという自信を与えてくれました。

図書館では、誰かに無理矢理に活をいられることはありません。時間、飲食等のある程度の制約があることを除いては、非常に自由な勉強場なのです。自由を求めるならば、部屋で一人で勉強すれば良いのではないかと考えるのが自然です。そこは、完全に自由な一人の世界なのですから。しかし、部屋では図書館でのようには行かないのです。能率が上がらないばかりか、うたた寝がうたた寝に留まりません。部屋には私が快適に勉強する為の何かが欠けているのです。そうです。図書館には不特定多数の人間がいるのです。皆それぞれのタスクを抱えて資料の山に埋もれています。授業のノートを復習する者、それを複写する者、調べ物をしている者、疲れ果てて寝てしまっている者。皆がカリカリ勉強しているあの切迫した緊張感が、多少重めの空気が私に活を入れてくれるのです。それは、殴られたような衝撃とは違って、肌で感じる冷ややかで静かな衝撃です。この衝撃が、勤勉ではない私をなんとか今まで支えてくれました。



今年、私は院生となりました。論文や文献を探す場という図書館の新たな一面も見えてきて、図書館との付き合い方も若干変わってはきましたが、自分が怠惰になっていると感じた時には活を入れるためよく足を運んでいます。

勤勉な方で、勉強に図書館を利用している方、そのまま頑張ってください。勤勉でない方、家では勉強できない方、この衝撃を感じに一度図書館に足を運んでみてはどうでしょうか。

(薬学研究科博士前期課程1年生)



自分を磨く場所 - CLEVER HOUSE -

由井 久美子

皆さんにとっての「図書館」とはどのような場所でしょうか。その答えは千差万別だと思いますが、私は「自分を磨く場所」であると思います。人間は自分の成長のためにいろいろなことを経験しなければならないと思いますが、読書はその中の一つではないかと思います。

21世紀に入り、インターネットの普及や国際化により世界はどんどん縮まっています。ですが、私たちが知っていることはほんの一握りのことかもしれません。「本」はそのような私たちに多くのことを教えてくれます。読書によって、私たちは未知の世界を知って視野を広げ、沢山の知識をつけ、想像力をたくましくし、自分を成長させていると思います。図書館はそのためのうってつけの場所なのです。

私の実家の付近や母校には立派な図書館があり、他の人に比べて「図書館」という環境に恵まれていたと思います。図書館独特の薄暗い明かりや重厚感、どこかしら漂う緊張感が私は好きでしたが、北陸大学のCLEVER HOUSEに足を踏み入れたとき、私の中の図書館というイメージは一変しました。

CLEVER HOUSEは棚・机・椅子など目に入るもの全てが上質な木でできており、非常にリラックスできる空気が漂っていました。また大きな窓により館内はとても明るくすがすがしく、本から目を上げ、ふと外を見渡すと山々の緑が目に入り、本当にリラックスした時間を過ごすことができます。

また蔵書量も豊富ですし、CD-ROMや新聞・雑誌記事の検索サービスや、1Fのパソコンなどでより多くの情報を手にできます。私はよく語学関連の本を探しに行くのですが、辞書や専門書だけでなく、論文や専門雑誌までもがそろっています。また、様々な分野の本がそろっている上に、常に新しい本が取り入れられるので、自分の視野を広げ、そこから新たに自分の考えを深めていくことができます。このようにリラックスした環境で非常に有意義な時間を過ごせるのですから、暇さえあれば足を運びたいと思ってしまう。このようなCLEVER HOUSEは、まさに「知」という面において自分を磨くのに最適な場所であると言えるのではないのでしょうか。

私は「一生勉強」という言葉はまさにその通りであると思います。ですが、今この若い時こそより多くの経験をし、成長するべきではないかと思います。身近にこのような素晴らしい環境があるのですから、自分の関心のあること、そうでないことでもどんどん興味を持って視野を広げ知識を吸収すれば、自分自身をより豊かにすることができるのではないのでしょうか。今はまさにそのための最適なときです。

さあ、あなたもCLEVER HOUSEで自分を豊かにする時間を過ごしませんか。

(外国語学部4年生)



大学生活と図書館

町 賢 司



私は、北陸大学に入学して以来、大学に登校する日は、必ずこの図書館に立ち寄っています。というよりも、自然とここに立ち寄ってしまいたくなくなってしまおうといってもいいかもしれません。しかしながら、毎回毎回立ち寄ってもこの図書館に飽きることはありません。では、この図書館には、どのような特徴があるのでしょうか。

まず、この図書館が、私たちを非常にリラックスさせてくれる空間であるということです。椅子、机、本棚、そして、階段の手すりに至るまでが木製であるということ。窓際から眺められる山々の風景がとてすばらしいこと。さらには、さまざまな場所に、観葉植物が置いてあることなど。そのために、静かで落ち着いた空間の中で勉強できるということを保証してくれます。こうしたことで、試験期間等に集中して勉強するには絶好の場であるといえます。ちなみに、私自身は試験期間になると、必ず図書館に来て勉強していたものでした。もっとも試験期間には、早めに行かないと学生でいっぱいになってしまい、席に座れなくなるということがありますが、しかし、それ以外にもレポートの作成や、英語など外国語授業の予習のために利用するのもいいのではないのでしょうか。

また、この図書館に置いてあるものが、どれも質、量ともにとても豊富であるということです。私は、図書館で毎日のように新聞を読んでいるのですが、その、新聞の種類及び量が非常に豊富です。全国紙の5大紙をはじめ、地元紙の2紙、さらには中国をはじめ外国の新聞もいくつかあり、また、1つの種類の新聞が置いてある棚には、1カ月近くの分量をまとめて置いてあります。そのため、1回訪れただけでは、とても図書館の新聞を読みきれないのではないのでしょうか。高校の図書館ではとても考えられないことでした。また、私は大学のゼミにおいて日本政治史をとっているのですが、その政治史、歴史関係の文献も豊富においてあります。私がゼミの研究ではじめて使用した文献は、この図書館に置いてあ

るものでした。その後も、4年生になるまでの1年近く、図書館にある文献を使用して、ゼミの研究を進めてきました。そのような意味で、私のゼミ研究は、この図書館が原点であるといっても過言ではありません。

私の大学生活にとって、この図書館はなくてはならない存在です。今後も、大学を卒業するまでの間は、大学に登校する度に、図書館に立ち寄り、学問に励みたいと思います。

(法学部4年生)





図書館唯識 - 先哲との邂逅 -

北村喜義

ヨーロッパ最古の大学は、Platôn (B.C.427~347) が Athenai の Akademos の庭園に創建した Akademie である。時空を超えて、創建の年 (B.C.387) の夏に私はその門を潜ったのであるが、師 Platôn は当時40歳にして既に第一級の数学者であった。

Akademie の門の扉には「幾何学 (μ) を知らざるものここに入るべからず」との掲示があり、私はその衝撃的な条件の意味の理解に苦しみ、暫し佇立していたことを照りつける逆光の眩しさとともに今も思い出す。

かねて幾何学に対する自己能力の限界の壁に阻まれ、政治哲学への転換を余儀なくされていた私が、天才たる師 Platôn に呈した最初の質問は、幾何学と政治哲学との連関である。その時、Barbarei の私に師が与えられた回答は、数学の方法であるところの一定の前提から必然的な帰結を導き出す方法が、広く問答法における厳密な理論と一致するだけでなく、その前提から帰結の方式が逆に帰結から前提へと逆上る dialektike の構想に大きな役割を演じるとするものであった。私が師の回答の意味を初めて解したのは G. W. F. Hegel, „Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte“ との邂逅によってであった。

私なりにそのことを解釈した場合、「いかなる理論もそれが理論である以上は、ただ単に個人の経験に適合しているだけでなく、科学の成果にも適合する必要がある。よって政治哲学も、当時の最も優れた科学的知識によって裏づけされなければならない。全ての科学理論の宿命は、いずれ、他の科学理論によって替わられることになる」

私が Akademie に学んで十年以上の星霜を経たころ、師 Platôn は過去35年間の研究の集大成として „Politeria“ „Politikos“ „Nomoi“ を相次いで著された。私は Akademie の図書館で、その内容の豊富、思想の迫力、記述の鮮明さに感嘆相止むことなく Papyrus に師の三部作を筆写した。筆写によって知の森は眼前にさらに拡大された。以後私の筆写苦行の慣行は何万頁にも及んでいき、今では北陸大学の学生に対しても課している。

さて、Akademie の敷地には中央に図書館、その左右に講義棟があり、その後方に運動場がある。図書館は北陸大学クレバー・ハウスよりも遥かに小規模なものであったが、師 Platôn を筆頭とする Tigerstedt, Wilamowitz – Moendorf, Fite, Friedemann と続く総合知の具人化たる講師陣容を見ればその規模は問題外となる。

つまり、「哲学の学校化」ではなく、「学校の哲学化」が大学なのである。「学校の会計化」である専門学校と大学との差異はここに歴然としている。会計は哲学を駆逐する。

とある日、図書館と運動場との連関について質問すると、師 Platôn は自著の „Politeria“ 第二巻の中の

数箇所を参考にせよと指摘された。そこには、「国家の優れた立派な守護者（ ）は、その自然の素質において、知を愛し（ ）気概があり、敏速で強い（ ）人間でなければならない」(367B) さらに「このような守護者に対する教育としては、身体の為には体育（ ）が、魂の為には音楽と文芸（ ）がある。そして体育による教育よりも、音楽と文芸による教育の方を先に開始すべきである」(376E)「一生を体育のみで過ごした場合は粗暴、頑固になる。音楽と文芸のみで過ごした場合は柔弱、温順になる。この両者は調和されなければならない。このことが守護者の教育と養育の一般的な規範である」(410C, 411E)と明言されていた。

さてこそ、私は、「知を愛さず、気概なく、鈍重で弱い人間」としての自己評価を確認させられ、Akademie に学ぶこと20余年にして、学成らず、されど死にもせず、無念のうちに師 Platôn のもとを去った。その後、「高貴なる嘘」を積み重ねることに心血を注ぎ、京都と神戸そして Deutsche Bibliothek を Akademie の代替とし、そこでの20余年の研鑽にしてようやく、専門学術書を書けない似非研究者の群から脱出した。と同時に私の残滓としての品位（ ）は焼失し私は一個の知（

）の浮遊物体に墮してしまった。それは私の「魂の肉化と肉体の魂化」を契機とし、K. Popper, „Offene Gesellschaft und Ihre Feinde“ によって齎されたのである。

その当時から私にとって図書館は牢獄（ ）と化した研究室であり、一人旅が「非日常の日常化」とすれば、図書館への埋没は「日常の非日常化」であった。さすれば、専攻分野の文献資料を自室に全部揃えている第一線の研究者にとって図書館のもつ意義は何か？ 山岳の高さは裾野の広大さに比例しているように、ひとつの研究は百の関連研究の上に構築されている。その裾野の凝縮体が数十万、数百万冊の書籍の重層空間としての図書館である。

私は何時ぞや大英博物館で苦闘している„ Das Kapital “ の著者の姿に感動したことがある。かくして人類の遺産が人類の英邁部分によって図書館で築き上げられていくことになる。過去累積何兆の人類が生んだ天才の総数は数百に過ぎない。そして図書館は天才の偉業の理解と復刻のための空間と時間の提供体といえる。

たとえば、受像機が捉えるアイドル宰相の無学識な双眸の持つ意味を理解したければクレバー・ハウスにおいて „ Politeria “ 第二巻 (487C-D) を紐解けばよい。

「船主（大衆）は船について知識に乏しく、判断能力に乏しいが、その周囲には多くの水夫（政治家）が自ら舵取り（支配者）として群がっている。水夫たちは真の操舵術の存在などそもそも最初から念頭になく、船主に眠り薬を飲ましたり、あるいは酒に酔わしたりして支配権を握る。これに対して真の操舵術を会得した者は無用のものとされ、白眼視されることになる。… 哲学者は社会的に抹殺されていく」

とまれ、我が終生の友 J. Göbbels を識り得たものも Heiderberg 大学図書館である。「世界を震撼させた日々」について彼とは激論を交わした。彼の哲学博士たる「高貴なる嘘」が自己のデマゴギーを巧妙に隠蔽していることに私は快感を覚えた。さらに、彼の上司となる絵描き出身の元伍長が私を Ein rotter Affe von Osten（東洋の赤猿）と評しているのを知った時、流石は Führer だと思い知った。

私が、その頃の知の豊饒の海を、「貧困の哲学」停止による「哲学の貧困」の世で暫し鮮明に回想でき、その一端をここに記したのも、クレバー・ハウスの森閑の中である。（法学部教授・学術資料委員）

読書感想文コンクール実施について

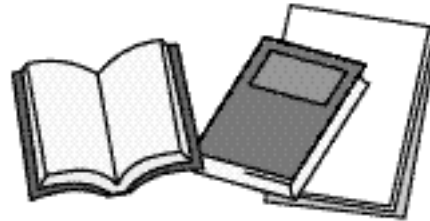
学生のライブラリーセンター活用を一層活発化させ、読書意欲をさらに向上させるために読書感想文コンクールを実施します。実施計画は次のとおりです。

第1回

読書感想文コンクール

募集期間 平成13年 7月9日(月)～10月末日

- 応募資格 北陸大学学生
- 対象図書 ライブラリーセンター所蔵図書
- 作品内容 上記図書の読書後感想(意見)文
- 書式等
 1. 手書き原稿不可
 2. 縦長A4判用紙使用
 3. 横書き、文字サイズ10～12ポイント
 4. 字数1,200～2,000字以内
 5. 図書名及び著者名の記載
 6. 学籍番号と氏名の記載
 (注)5,6は字数制限に含めない。



- 主 管 北陸大学ライブラリーセンター
- 後 援 学術資料委員会

問い合わせ先
ライブラリーセンター本館・薬学部分館



寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

著 者	書 名	寄 贈 者
マサオ・ミヨシ	我ら見しままに	村上 良夫(外国語学部教授)
三浦 泉 他	新・薬と社会と法	三浦 泉(法学部教授)
武田 誠	放火罪の研究	武田 誠(法学部助教授)
菅沼雲龍他編集	中国歴史文化研究	菅沼 雲龍(法学部講師)

編 集 後 記

ライブラリーセンターでは、読書環境を一層整備・充実させ、学生が読書の楽しみを知り、その素晴らしさを実感する機会を提供するために、今年度より、読書感想文コンクールの実施、また、講演会等の開催も予定しております。皆さんの、積極的な参加を期待いたします。

CONTENTS

本を探す楽しさ、読む楽しさ	1
情報化社会でよりよく生きるために	2
勤勉でない方へ	3
自分を磨く場所 - CLEVER HOUSE -	4
大学生活と図書館	5
図書館唯識 - 先哲との邂逅 -	6
読書感想文コンクール実施について	8
寄贈図書.....	8

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.12 2nd-Half 2001

平成13年10月1日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL . 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印 刷：カンダ印刷株式会社